

覆面座談会

デング熱媒介蚊の駆除作業に従事して

「感染症予防衛生隊」が本格出動

この貴重な経験を今後の活動に生かそう！

今回、東京都ペストコントロール協会の感染症予防衛生隊が、デング熱媒介蚊の駆除作業のため、約1ヶ月半にわたり都内各所に出動しました。そこで、

- 1、東京都からの依頼の経緯
- 2、東京都とペストコントロール協会の連携について
- 3、具体的な活動内容
- 4、マスコミとの対応
- 5、活動を通じた問題点・反省点など

について、作業に従事した隊員の感想を交えながら、率直にお話いただく座談会を企画いたしました。



報道陣を前にしたハンドスプレーによる散布

代々木公園で緊急に薬剤散布

—最初に、感染症予防衛生隊の出動経緯についてお話をください。

A 8月27日に厚生労働省から「デング熱患者が発生した」との発表があり、翌28日に東京都から協会に「蚊の駆除のための薬剤散布をしたいので相談にのってもらいたい」という連絡がありました。

早速、患者が蚊に刺されたという代々木公園に、玉田会長と江島専務理事が出向き、駆除についての打ち合わせを行いました。話では代々木公園の渋谷門近くで、学生が何人か集まって学校行事の準備をやっている時に刺されたということで、対策として渋谷門から半径75メートルの範囲を中心に、

緊急に薬剤散布をして欲しいということでした。

協会の感染症予防衛生隊の業務として引き受けることにしましたが、その日の夕方から散布を行うという緊急対応で時間もないことから、(株)環境衛生サービスセンターにお願いし、動力噴霧機を使って急遽実施いたしました。

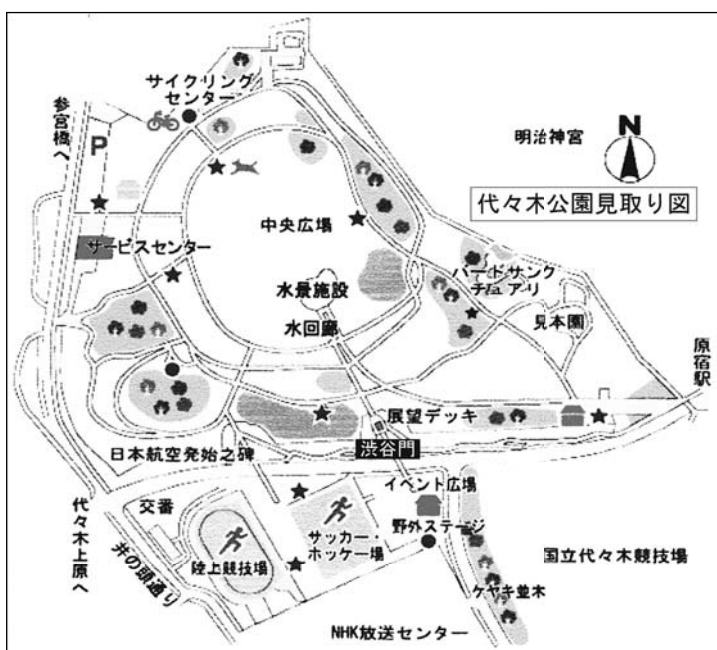
その後、代々木公園で4回、他に青山公園、青山霊園、上野公園などでも薬剤散布を行っております。また、所管は東京都ではありませんが、新宿御苑についても依頼があって3回散布をしています。

今回は東京都の福祉保健局健康安全部環境保健衛生課および代々木公園を所管する

東京都建設局東部公園緑地事務所が動いて、協会の感染症予防衛生隊が出動したというのが主な経緯です。

I 感染症の患者が発生したということであれば、本来は同じ健康安全部の感染症対策課が扱う事案かと思います。

今回、デング熱媒介蚊の駆除ということで、環境保健衛生課が担当することになったのではないのでしょうか。協会は今回のデング熱媒介蚊の駆除は、動物由来の感染症対策の一つであると考へて、感染症予防衛生隊が薬剤散布に出動しました。



D 具体的な話、たとえば薬剤は何を使ってくれとか、そういう話はなかった？

I 出ませんでした。その点について我々は、感染症予防衛生隊が3年前に蚊の駆除実技の研修をやっており、室外の空間に散布しても、人にやさしく、自然環境に悪影響が少なく、駆除効果があることを確認した防疫用薬剤を散布することにしました。

とにかく「人に安全にということをやりますから、薬剤や機材の使用方法は任せてください」という話をして、エトフェンプロックス7%水性乳剤を撒きました。

それと、我々は東京都と「蚊が媒介する感染症の発生に備えた蚊の駆除業務等に関する協定」を結んでいますので、今回は都の公園内での媒介蚊の駆除ということで都から依頼がありました。

区とは協定を結んでいませんので、区の公園等については区が独自に実施したようです。その辺、多少わかりづらいところがあると思います。

— 東京都の保有施設については、協会が

東京都と協定を結んでいて、東部公園緑地事務所が代々木公園の管理主体であるということから、東部公園緑地事務所がメインとなって我々の協会と話をしたわけです。

感染症ではあったけれども、実際に管理しているのが公園管理の方だから、そちらが動いたということなのでしょうね。そのへんが複雑になっていて連絡体制が非常に難しくなってしまったと言うことがあります。

I 事務局は5時で終わり。携帯電話に掛かってくるのは大体6時過ぎ。毎日、携帯に掛かってくる。(笑)

E 連絡が取れたからよかったものの、もし電話が取れない状態だったら、そこで連絡網が遮断されるわけです。アフターファイブの連絡網をどうするか、非常に難しいところがありますね。

H 私も9月4日、代々木公園の第2回散布前日に連絡をいただきましたが、多分、感染症予防衛生隊に片っ端から連絡されていたのだと思います。あの時はうちからも人を出

Dengue熱媒介蚊の駆除作業に従事して

せたので良かったのですが……。

D うちも協会から4日に電話があって、3人出そうという話になったんです。

E 今回の Dengue熱対策もそうですが、事務局で対応できない土日とか、平日の5時以降というケースについては、感染症予防衛生隊長が連絡窓口になっていますが、連絡体制の再整備が必要ですね。

「人の安全」をメインに人海戦術で散布

— 今回の Dengue熱の問題は、報道が先行して、まずニュースで取り上げられました。あのニュースが出た時に、皆さんはどう思いましたか。

B これは協会が動かなくてはならない騒ぎになるだろうと思いましたね。

F 確かに何か大きなことになって行くだろうという思いはありました。けれども協会内の動きがなかなか伝わってこなかったもので、どうすればいいのかというのが最初の気持ちでした。

C 私も東京都との協定があるから遠からず話ができるだろうとは思いました。しかし、ニュースの中に東京都ペストコントロール協会という名前が全然出てきませんでしたね。

I 最初は都の作業員という形での対応でした。我々としては感染症対策なのだからタイベックに協会のシールでも付けようかという話をしていたのですが、都の方からものものしいからやめてくれと言われ、時間的にも入れるヒマはありませんでした。

— 2回目の作業の時もそうでした。前日にタイベックでやる完全防備の準備をしていたのですが、それは困るといわれ、しかも2回

目は動力噴霧機ではなくハンドスプレーにしてくれという指示が出されました。それで急遽、ハンドスプレーに変更しましたが、おかげで作業した人は全員くたくたでした。

I その打ち合わせをやったのが、9月4日、2回目の作業の前の日でした。その打ち合わせの時に広い範囲をハンドスプレーでやっても効くわけがない。それだけ人数も必要になります。

G あれは本当に疲れました。水がすぐに無くなってしまいます。それを補充しながら夕方6時ぐらいまでやりましたからね。

I 急遽、水を手配してもらって、みんなへとへとになるまで歩き回って撒きましたが、結果としては原液を11リッターしか使っていません。

代々木公園の場合は5回やっていますが、公園内の状況により散布箇所が抜けている部分が相当多く、やっていないところからウイルスが発生しているケースが多いです。それで最終的には動力噴霧機で散布しています。

H 撒き残しという点では、青山墓地の時も同じです。墓は個人のものだということで、撒けないところはかなり多かったです。薬剤がかかるので一つ一つ墓の所有者の許可を取らなければ撒けない。そのため共有の場だけを撒く。そうするとかなり撒き残しが出ます。勿論、やる前と後でスウィーピングしてみると、蚊は若干減ってはいますが、やはり撒き残しが出たのは残念ですね。

D 管理者の区分とか、共有・個人の所有別でやるのではなく、地域全体を面に対応しなければ効果は限定的になるのは仕方ありません。

H 青山霊園のように古く歴史のある墓地は、特に難しいです。

G でも、なぜ地味なハンドスプレーだったのでしょうかね。

—作業をやっている風景が、大々的にやっている雰囲気になってしまうのはまずい。舛添知事と厚生労働大臣が取材を受けた時に、 Deng 熱は危険なものではない。仮に罹ったとしても軽い症状で治まるから心配しないでくれ、ということを一生涯懸命言っていたんです。一つにはそうしたことも背景にあったと思います。

C 協会の意見と都の意見を調整して決めるということは出来たのですか。

I というより、感染症の患者が出た、ウイルスが出た、というところで散布するという感じです。

E 出た場所は強化してくれということで集中しました。

I すべてウイルスが発生した時点でGOです。

C 予防的な処置はなかったのですか。

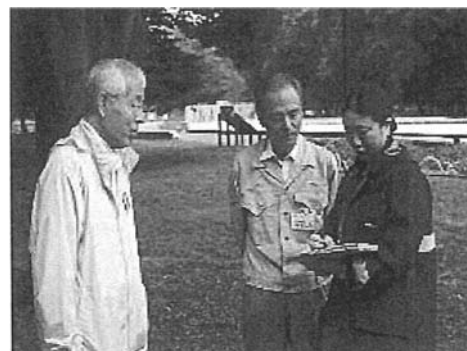
I まったく無かったです。あそこが出た、ここで出た、GOです。

G ヒトスジシマカというのは何メートルぐらいの高さまで飛ぶのですか。

H この間のセミナーで7.5メートルと聞きました。だからかなり上に撒く必要があります。

I ところが国立感染症研究所は肩より下、それより上に撒く必要はないという見解です。

—2回目の作業をやる前の晩に、東京都がテレビで生態系に影響がないように少量の散布にするということを言っています。それ



都の職員と打ち合わせる玉田会長

がハンドスプレーになったのかどうかは明確ではありませんが、生態系とは何か、何を守るためにやるのか、その辺も非常にわかりにくい話です。

I 対象害虫の問題点というのは、すべてここに任せてくれればいいわけです。ところが現実にはいろいろなところから見解が述べられ、現場は上からもいろいろ言われますから、一番安全なハンドスプレーでやろうということになったのだと思います。しかし、それでは効果も弱いし、抜けている部分が相当多いため、3回目からは動力噴霧機も併用してやるようになったわけです。

H 今回は、蚊に対する効果判定はあっても、他の生物に対する影響というのはあまりありませんでしたね。

—要するに環境アセスメントのような発想を持って評価の数値を出せということはまんざら間違いではないと思いますが、我々がそこまで請け負えるかどうかは考えなければいけません。

H 現実には緊急対応ですから、それは出来ないと思います。

I その意味でも「人に安全」をメインに掲げたわけで、我々としてはそれでいくしかありません。

Dengue熱媒介蚊の駆除作業に従事して

裏方に徹したマスコミ対策

—今回、現場では報道陣が100人くらい入門許可を待って、それが一斉に入ってきて我々を追っかけ回す。あの絵はすごかったですね。



散布状況を撮影している報道陣

G 作業が進まなくなりましたね。ポーズを取ってくれとか、写りのいいところに戻って構え直してくれとか……。

I 動力噴霧機の時も実際には、きちんと下の方にも撒いていたのですが、それでは絵にならないから上に撒けという。マスコミとしては絵になる撒き方を求めたわけです。

C 皆さんの作業がマスコミによって妨害されたのではないかとということ、同時にその一方で報道を見ても協会の名前が全然出てこなかったですね。

I それは、協会の扱いが都の作業員だからです。マスコミに対しては一切口を利かないでくれと言われておりました。都には広報の担当がいてその人が必ず来ていて、我々のことは一切伏せられていました。

—マスコミの対応については、新宿御苑もまったく同じです。我々は表に全く出ない。環境省の職員が直接話をします。それと新宿御苑の場合は東京都ではなく国(環境省)の依頼で、感染症対策をしてほしいということでしたから、タイベックで、ゴムの長

靴、ゴム手袋、マスクという形で、装備は完璧でした。それで背中に協会の文字が入っている服を着てPRしようと思ったのですが、マスコミは作業の様子を映したいから、前や横のアングルばかりで背中には写りませんでした(笑)。

—ハンドスプレーで下を向いて撒いているのを後から見たら、何をやっているのか映像では分かりませんか。

それで、ハンドスプレーが良かったかどうかということは別にして、防除方法として、あれで良かったのかということを見ると、今回は動力噴霧機とハンドスプレー、このふたつでやっています。実際に作業を行った我々には最善の策がなかったのかどうかです。

F やっていて思ったのは、ハンドスプレーだと作業効率が悪くて苦労の連続だったということです。調べたら15リッターぐらい入る背負うタイプの動力噴霧機があります。そういった機材があったら良かったと思いました。

—実際に持っている会社はあるんですか。

D 前に調べたらほとんど無かったですね。

—ただ、方法論として考えると、それだったらもっと出来たのではないかという今の話は大事な事だと思います。ほとんどの会社が持っていないのは何故か。プロなのにいらぬのかということです。

D 逆に言うと、日常業務に使用することもなく出勤の時だけのために用意出来るかという話です。

C それと炭酸ガス製剤の話が出ていませんね。

I 東京都ペストコントロール協会としては

「人に安全」を第一にということで、エトフェプロックスを使っているわけです。100倍以上に希釈していますから、ほとんど問題ないです。とにかく「危」というものを無くそうということで対処しています。

B 炭酸ガス製剤をあまり使わない方がいいというのは、風があると流れてしまうからです。液剤なら、一応、残留噴霧という形で、成虫がそこに止まった時に効果が出ます。

D ホテルからの依頼で夜間、植栽周りを炭酸ガス製剤でやったことがありましたけれども、やはり風があると全然だめですね。それと代々木公園のような広いところを炭酸ガス製剤でやるのは、コストを含めて大変難しいです。そうするとやはり動力噴霧機は残留性もあるし、成虫に対する直撃もあるし効果的です。作業性も考えると、うまく使い分けが出来れば一番いいと思いますが、それだけの機材も薬剤も備蓄・保有していなければいけないので、そのコストを誰が負担するかです。

——ただ、方法論としては、炭酸ガス製剤もありだと思いますね。

B スイニングフォグ(煙霧機)を使った例もありますね。

——静岡で発症したケースで、初島での作業は煙霧機で作業していました。島内全部をやっています。やっぱり煙霧機は映像として格好いい。(笑)

C それぞれの方法、長所短所を明確にして、場所に応じて使い分けることが大切ですね。

——今、動力噴霧機、煙霧機、背負い式動力噴霧機、炭酸ガス製剤、ハンドスプレーの



動力噴霧機による作業

五つが出ていますが、他はありませんか。

I あとは昔あった2兼機、3兼機。

——もう機械ないでしょう。

——うちも2兼機が5台あります。新規で買うと80万円するらしいです。

E 霧の状態はハンドスプレーでも同じです。それならみんな持っていますから、それでいいと思います。動力噴霧機を持っていてもタンクが100リッターぐらいしかないのはあまり意味がありません。最低200リッターは必要。出来れば400リッター、大きければ大きいほどいいけれど、持っている人は少ないです。

——蚊の駆除では、平常の対策、緊急時の対策の二つの考え方があると思います。今回は緊急対応でしたが、そうした時に我々が出来る一番の方法とは何か。機材や資材、あるいは薬剤の購入、ストックの問題も含まれてくると思います。緊急ですから当然すぐ出勤しなければならない。その時、何が出来るかです。

F 何よりもまず、作業する人をいかに確保するかです。有事に備えて感染症予防衛生

Dengue熱媒介蚊の駆除作業に従事して

隊に加入している人は、拘束性というか、待機するという必要になってくるのかなと思います。

D それは会社の体制に関わることで、日常から待機出来る人を置くぐらいの余裕が無ければ出来ない話です。現実には待機の経費を考えてもらわないと無理でしょうね。

また、出勤した作業員が事故にあった場合の災害保障についても考えてもらいたいですね。

—今回は協会の知名度アップのための大チャンスでした。ところが一人で矢面に立つ会長の姿すら遠くに姿が映る程度でした。

C 確かに淋しいですね。

B 東京都に取材依頼が行っていますから、許可は東京都が出す。作業している我々は下請け。そんな扱いになってしまったのだと思います。

C ただ、実際に第一線で仕事をしているのは東京都ペストコントロール協会の感染症予防衛生隊でしょう。ちゃんと業務協定を結んで出勤しているのですから、もっと報道されるべきです。

D 技術委員会で感染症マニュアルの改訂を進めていて、ほぼ完成しましたが、その中でビブスを作って、何かあった時はそれを着ようというところまで来ていました。ただ、今回は間に合わなかった。用意出来ていれば、1日目は着て作業することが出来たわけです。外せと言われる可能性が高いけれども、そういうことを申し入れていかないといつまでも都の下請け社員になってしまいます。

—マスコミがどう捉えるのかですが、マスコミは実際の作業をやっているのは誰だろ

うと絶対興味を持っているはずですよ。

I 作業車を映していますからね、車の横に文字が書いてあれば映ります。

—いい意味でマスコミをもっと利用することを考えなければいけないですね。我々には宣伝をするだけの資金が無い以上、現場で作業をしている時に宣伝媒体をうまく使うという方法を考えなければ……。

C ハチについてはすごく取り上げるじゃないですか。やはり興味の違いですか。スズメバチなんか、過剰と思えるほどです。

—それにはマスコミの興味をそそる何かやらなければダメでしょう。普段絶対見ないような機材を使っているところを映像に撮らせるとか。デモンストレーションも必要です。

もっとペストコントロール協会の存在を アピールしよう

—今回の問題は、来年もまた起きる確率はかなり高いと思います。実際に起きた時に我々は何をしなければいけないか……。

H まずモニタリングが大事だと思います。それから薬剤の備蓄ですね。

—今回、作業の体制や連絡網に関してかなり問題があったと思いますが……。

E 都からの依頼は時間があるようで無い。電話1本で次の日に出動出来る迅速な連絡網を再構築しなければならない時期にきているのかなと思います。

—連絡網を早急に再構築して、本当に連絡が取れるのか、人を集められるのか、テストすることも必要でしょうね。それと役割分担という問題もあります。会長一人に集中することを避けて、ブロック長を10人作

るとか、もう少し分担すべきです。

E 普段、理事会や会合で顔を合わせて、名前を知っている人同士だと連絡しやすいですが、会社名しか分からず顔も知らない人もおります。そういうことを無くすことも必要です。

—感染症予防衛生隊なら全員一緒のはずで、顔が見えないというのはおかしいです。

D たとえば予行演習をするとかです。

私が一番反省したのは、今回、感染症のマニュアルの改訂が間に合わなかったこと。組織とか体制が機能しなかったことです。それに合わせて技術委員会がまったく出てこなかったのも、技術委員会を活かす方法を考えていかなければならないと思います。それと感染症予防衛生隊は21社あるのに、全然声がかかっていない会社がありました。全部の会社の状況を把握して、いつでも出動出来る体制を作る必要があると思います。

—技術委員会の中で、機材とか、薬剤とか、今後検討する予定はありますか。

D 薬剤については薬害の問題もありますが、緒方先生が中心になって武蔵野市でやった試験は、ものすごく大きなプラスになりました。その中から一番毒性の低いものを選んだということで、濃度も50倍というのは非常に大きな意味がありました。

もう一つは、蚊に対する防御を我々は何もしていませんね。感染するかも知れないのに現場で蚊に刺されている。我々も感染の危険をもっているわけですから、タイベックを着てきちんとやっていかないといけないと思います。

I デング熱対策では、それが本来の姿です。



背負い式動力噴霧機

ところが今回はその姿を消され、単なる蚊の駆除にされてしまった。だから、私は意地もあって半袖姿で怖くないというのを見せましたが(笑)、感染症に出動した我々が罹ってはいけません。

—二次感染を起こさないというのが最大の原則で、そこを防御しないというのは、法を守っていないことに近い、絶対にやってはいけないことです。これは来年の反省になります。

F 私もこの間改めてタイベック着用の練習をし直しましたがけれども、あれはやった方がいいですね。

—蚊だから、タイベックを着ることが正しいとは言わないけれども、たとえばエボラ出血熱の場合でも、ガウンテクニックを間違っただけで眼鏡を触って感染したとか、そういう例が出ていますからね。

B 感染研の先生が、初動のときに各社から集まった人を見て、やはり寄せ集めはだめみたいなことを言っていたんです。実際にうちの社員にハンドスプレーを撒かせたら、中には適当にやっていた社員がいたことは事実で反省させられました。しかしハンドスプレーを使う時に、目的は何か、動力噴

Dengue熱媒介蚊の駆除作業に従事して

霧機ではなく、なぜハンドスプレーでやるのかということを理解した上で作業することが基本だと思います。きちんと統一した作業方法の認識を持ってやらないと、PRだけの作業になってしまいます。

G ハンドスプレーを使わなくてはいけないという理由が分かってからは、仕方ないと思いましたが、やはり都との連携が今回初めてということで、そういったことがあったのかなと思います。

—確かに認識の統一というのはあまり無かったですね。

I この間の理事会でも社員の教育が悪いと言いましたが、感染症の研修会に出てきている責任者の人達が、自分の会社で感染症の指導をしていません。だから、こんな社員が来ているのかという話になるのです。

E 研修に行った人が必ず現場に行くということではないですからね。

—ただ、それを現場では言えないですよ。

I そう。お前初めてだろう。こうやって撒きなさいなどとみんなが集まっている前ではとても言えません。よく顔を合わせて知っている相手なら、お前やり方知らないだろうと言えるけど、見知らぬよその社員には言えないでしょう。

—それは参加していない会員の方にも、理解していただくために伝えなくてはならないことです。

H あと平常時にどうやっていくかが重要だと思います。撒き方一つとっても、相手を知らないと上から撒いてしまったりするわけです。IPMの発想で考えて行けばいいと思います。

—発生源対策は根本そのものですが、

我々は依頼を受けて出動する立場ですから、勝手にやることが出来ないという事情があるわけです。たとえば都内でもどこでもそうですが雨水枡の対策があります。新宿御苑の例では御苑内はちゃんとやっていますが、外周の雨水枡には全く手を付けていません。そこは渋谷区と新宿区が重なっている部分で、どっちも何もやっていない。じゃあ、そこに蚊がたくさんいる雨水枡があるからといって、我々が勝手に作業出来るかということ出来ない。そのジレンマがあるわけです。

H ただ、こういう緊急事態があった後ですから、区側に提案すれば受け入れられるのではないかという思いはあります。働きかけていきたいですね。

I 今回は一つの薬剤でやりましたけれども、今後も「人に安全」を第一条件として薬剤の選定や量について、技術委員会の方で感染症予防衛生隊を指導してほしいと思います。

D マスコミで蚊についての啓発が市民にこれだけ繰り返し報道されたことは、蚊に対しての注意を喚起したという点でよかったと思います。

それとオリンピックに向けて我々は4月から動いていましたが、都はまだまだ本腰を上げませんでした。それがここへきて舛添知事が重大な問題だと認識して、きちんと対策をして行きますと発言しています。我々にとって非常に良い追い風になったと思います。

—実際に我々が出動したという実績を残せたということ。それと蚊は痒いからとか、不快だから駆除するのではなくて、媒介害虫だから駆除するのだという認識を新たにしてもらえたことは大きな成果だったと思

います。その媒介害虫の防除に取り組んでいるのは東京都ペストコントロール協会だということをアピール出来なかったことは非常に残念ですが、作業の体制とか、内容とか、かなり修整をしておかなければならない点のはっきり見えたこと、来年までまだ時間があるということも、我々にとって非常に有利なことです。

E 来年この問題が大きくなることを想定すると、21社の感染症予防衛生隊が出動する時は、統一した作業服を着てアピールしたいですね。マスコミに報道された時に、いつも同じユニホームの人達が対策をやっていると興味を持ってもらうためには、統一した作業服を着ることが不可欠ではないかと思います。予算がかかることですが、協会として考える



スワイーパーピング

べき時期に来ているのではないかなと思います。

——今後の協会の活動を、みんなで同じ考えを持って前に進んで行きたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

